

幼児の音楽行動から構築される「音楽の場」
－「歌い手」と「聴き手」の相互のかかわりを中心に－

氏名 渡邊 佐恵子

本研究は、幼児の音楽行動を「歌い手」と「聴き手」の相互のかかわりという視点から捉え、そこから生成された「音楽の場」の構築過程について明らかにすることを目的とする。

序論では、これまでの子どもと音楽に関する先行研究について概観し、パトリア・シーアン・キャンベル（Patricia Shehan CAMPBELL）の著書から、子どもたちの音楽行動について、子どもたちの音楽の文化の脈絡から切り離さないで検討すること、そして、さらに一人一人の子どもたちの行動を見ていくことが重要であることを確認した（CAMPBELL 2010）。

子どもたちの音楽行動からは多様な「音楽の場」が形成されていくが、本研究では、その中でも、歌を媒介とした子どもたち同士のかかわりについて検討していく。そこで本研究では、永原恵三（2012）が論じている「歌い手」と「聴き手」の関係性から子どもたちの音楽行動について考察する。永原は、音楽の営みそれ自体だけではなく、声による音楽行動から広く人間の営みを捉えている（永原 2012）。本研究では、実際に声を出している「歌い手」だけではなく、声は出していないが、「歌い手」が歌うことによって反応し、手を叩くなどの身体的動作を伴いながら聴いたり、その場でじっと歌を聴いたりしている「聴き手」の子どもたちの行動にも焦点を当てる。

研究方法としては、音楽療法士である生野（山本）里花（2015）の研究を参考とする。まず、観察終了後に子どもたちの音楽行動を記録した「場面記録」を作成した。次に、そこから選択した本研究で取り上げる3つの場面について、その事例にかかわる子どもたちや保育者の行動を一人ずつ時系列に記した「場面記述」を作成した。そして、その場にいた観察者として、子どもたちの行動に一定の解釈を与えた「やりとりの叙述」も作成し、子どもたちの歌や身体の動きを記した楽譜も併せて考察に用いることとした。

第1章では、《チョコキチョコキダンス》（作詞：佐倉智子、作曲：おざわたつゆき）の冒頭部分を繰り返し歌う3歳児から始まった「音楽の場」について検討した。「歌い手」である3歳児が歌うことでこの場が始まったが、「聴き手」である2歳児が手を叩き、最初は特に身体的動作を伴って歌っている様子ではなかった「歌い手」が、次第に両膝を屈伸するなど、「歌い手」である3歳児の身体の動きと、「聴き手」である2歳児が手を叩く行為は音楽的に「共振」していることが明らかになった。つまり、「歌い手」から働きかけるだけではなく、「聴き手」からも「歌い手」に対して働きかけることで、「音楽の場」が構築されたと考えられる。

第2章では、《ハッピー・バースデー・トゥ・ユー》を歌う2歳児から始まった「音楽の場」について、主に「歌い手」と「聴き手」が交替していった過程や、「聴き手」としてその場に参加していた子どもたちの行動から考察した。

2歳児のk児とi児は、互いの歌を聴くことで、音楽的に「共振」しながら「歌い手」と「聴き手」を交替していった。また、少し離れた場所にいた2歳児のr児やs児のような、一見この場には参加していないように見える子どもたちも、歌を聴いたり、その様子を見たりして、実は「聴き手」としてこの「音楽の場」に参加していることが明らかになった。このような「聴き手」の子どもたちの存在も、「音楽の場」では重要であると考えられる。

第3章では、3歳児のY児が絵本を見ながら《ふうせん》（作詞：湯浅とんぼ、作曲：中川ひろたか）の歌を歌うことから始まった「音楽の場」について、「歌い手」と「聴き手」のやりとりや、「聴き手」の存在を意識したときの「歌い手」の歌い方の変化、さらに、この場における「聴き手」の存在を中心に検討した。「歌い手」であるY児が自己の中で歌うときと、「聴き手」という他者を意識して歌うときとで、歌い方が変化した。それは、Y児が「聴き手」である子どもたちを「共にいる」存在と認識したことで、「音楽の場」におけるY児の「歌い手」としての立ち位置も変化したためだと示唆される。

さらに第4章では、永原（2012）における「歌い手」と「聴き手」の関係性が、各事例でどのように見られるのかを検討した。

以上を踏まえて、まず本研究の意義としては、「聴き手」の存在に着目した点が挙げられる。いずれの事例でも、「聴き手」の子どもたちは、「歌い手」の子どもたちの歌を「よく聴く」ことで、手を叩いたり、身体を揺らしたり、じっと聴き入ったりしていたが、それは言い換えれば、「歌い手」の存在自体を感じとることでもある。

また、「場面記述」を作成する過程で、筆者は、この場にかかわっていた子どもたちや保育者、それぞれの視点に立つことができたが、その誰もが「音楽の場」の参加者であり、一人一人が、この場が持続するうえで欠かせない役割を担っているということが分かった。つまり、その場にかかわっている人物それぞれが「主体」であることが確認できた。

つまり、「音楽の場」は、「歌い手」と「聴き手」の子どもたちの音楽行動が相互に交わりながら生まれた「場」であり、一人一人の子どもが「共にいる」存在と認識することで構築されることが明らかになった。

引用・参考文献

CAMPBELL, Patricia Shehan

2010 (1998) *Songs in their heads: Music and its meaning in children's lives* (2nd ed.),
New York, New York: Oxford University Press.

生野（山本），里花

2015 『音楽による共生－音楽療法場面の分析解釈から－』お茶の水女子大学 博士論文.

永原，恵三

2012 『合唱の思考－柴田南雄論の試み－』東京：春秋社.